

旅の必需品－あかり－

写真は「饅頭根付燭台」といい、高さが約 17 cmの組立式のろうソク立てで、芯切もぶら下げられるようになっています。また携行時には分解して小さく折りたたんで収納し、根付（印籠などを帯に挟んで下げる時、落ちないようにその紐につける留め具）にもなる、旅道具のひとつです。江戸時代の旅は道中の大半を自らの足で歩くため、持ち物は軽くて機能的、携行に便利のように工夫されていました。

江戸時代、街道が整備され比較的安全に旅ができるようになると、庶民の間にも旅が身近なものとなっていき、旅の流行とともに道中記（現在のガイドブック）などが数多く出版されるようになりました。旅の心得などを紹介している『旅行用心集』（文化7年）には、「旅行の所持品について」の項目に「矢立・扇子・糸針・懐中鏡、日記手帳・櫛と鬢付油・提灯・ろうそく・火打道具・懐中付け木、麻綱、印板」と記されています。

現在では、旅先の旅館や町が夜でも明るく照らされており、旅行に照明具を持参する必要はありませんが、江戸時代には提灯やろうそくが旅の必需品でありました。



▲饅頭根付燭台



▲収納時